

論文 内モンゴル・ホルチン地方の靈魂觀と惡  
靈について (特集 1 シャーマニズム研究の  
新視角)

著者	サランゴワ
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	26
ページ	62-81
発行年	2011-06-30
その他のタイトル	About Spirits and Ghosts in Inner Mongolia, Horqin Distric (<Special Edition 1> Some New Approaches in Shamanism Studies)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/117556">http://hdl.handle.net/2241/117556</a>

## 内モンゴル・ホルチン地方の靈魂観と悪霊について

サランゴワ<sup>※</sup>

### 1. 靈魂観

ホルチン地方<sup>1</sup>は内モンゴルの中で、シャマニズムが生き残っている数少ない地域の1つである。ホルチン地方の靈魂観に関する先行研究では、人間に3つの靈魂があり、「1つは、墓を守り、1つは、世を彷徨い、もう1つは、転生する」という記述にとどまり、具体的にどのように理解され、語られているかについて、ほとんど研究されていない。これからは、主に、筆者が現地調査で得た資料を基づいて記述し、それによって、靈魂観・死生観に関する理解を深めることを目指す。

宗教人類学者の佐々木宏幹は、次のように靈魂観を定義する。「人格的な靈界存在の基本的なものは『靈魂』と『精靈』である。靈魂は生命原理としての側面と人格の乗物としての側面を持つが、その基本的な特徴は自らの宿り場を自由に離脱できることであり、これが生死、病気、夢、他界などの諸観念と結合して多様な『靈魂観』を構成する」[佐々木宏幹 1979:255]。この的確に定義された靈魂観は、今日のホルチン地方の伝統信仰によく当てはまる。次に、ホルチン地方の靈魂について、見ることにする。佐々木の「精靈は靈魂観念が生物、無生物を問わず種々の存在に及ぼされたもので、人間以外の存在に認められた靈魂を指す」[佐々木宏幹 1979:255]なる定義は、ホルチン地方では、具体的にどのように表象されているだろうか。

ホルチン地方の靈魂観を論ずる前に、モンゴルの靈魂観について論じた先学の説を見てみることにする。モンゴル語で、靈魂のことを「スウンス」と一般的に言う。モンゴルを含めた、世界中の多くの国や地方の人々は、生物としての肉体が減びても靈魂が不滅で、靈界で、引き続き生き続け、子孫や関係者に種々の影響を及ぼすと考えられている。靈魂観の発生論、魂の形態、数、居場所、生霊と死霊の活動、行方について、先行研究で盛んに取り上げられ論じられてきた。先学の記述を見る限り、基本的にモンゴル人には、魂が3つあるという説が多い。モンゴル国の学者チ・ダライは、生命魂、遊離魂、転生魂という3つの魂があると考え、「死霊は不滅で、子孫を加護する。それを怒らせないように、常に祭り、供物を捧げることが重要である。次は、心気あるいは、一時的な魂で、この魂は体から完全に離れることがなく、この世をさまよう。プオによると、睡眠状態は一時的な死であり、魂は体から一時的に離れて、物事をこなしてから胴体に復帰すると、人は復活し、目覚める。そして、転生魂は、死後、体から完全に離れて、顔を変えて、別人として生まれる靈魂のことを言う」[チ・ダライ 1959:55-56]。チ・ダライのこの説にボラグも賛成し、次のように説明する。「生命魂は、人が死ぬと胴体から離れ

※ 慶應義塾大学訪問研究員

るが、不滅である。目に見えず、捕獲することができないが、子孫を加護する。そのため、子孫は生命魂に供物を捧げる。遊離魂は、また、一時的で、人間の思い、あるいは気持ちの魂である。この種の魂は体から完全に離脱しない。睡眠中に一時的に体から離れるが、まもなく復帰して体に宿る。転生魂は、人が死ぬと、胴体から完全に離れて、別人として生まれ変わる」[ボラグ 2003:43]と述べる。これらの靈魂は、頭、血、骨に宿ると見ている。血は、体全体に存在するので、靈魂は人間の体中すみずみに存在すると理解しても良い。モンゴル国の場合、「人に母から得る血と肉に宿る魂、父から得る骨の魂、そして意識、あるいは命の魂がある」[オ・プルブ 2006:139-140]という。

ホルチン地方では、一般的に、人間に靈魂が3つあると言われる。一方、1つしかないとみなす人もいる。ホルチン地方で調査を行い、一般人に人間の靈魂はいくつがあるかと尋ねると、返ってくる答えはいつも、「3つあると言われる、本当かどうか知らない」、「3つある、1つは、墓を守り、1つは、世を彷徨い、もう1つは、転生すると言われる」、「3つあると言われているが、見たことがない」などである。また、若い世代の間では、「人間には、魂が1つしかない」と考える人が少なくない。ブオたちは、靈魂が3つあるという点では考えが一致する。この説は、あくまでも、死後の靈魂の行方を意識して語っている。

この説からもまた、ホルチン・モンゴル人の死後の靈魂に関する信仰、死靈観が窺える。

ここからは靈魂観について具体的な事例を上げてみよう。

「ウフッセン・スゥンス」で死靈を、「アミド・スゥンス」で生靈を指す。「テヌル・スゥンス」で、この世をさまよう靈魂を意味する。また、「ジョールテイン・スゥンス」で亡靈を指すほか、夭折した人の靈、非業の死を遂げた死者の靈など不自然な死を遂げた人の靈を含めている。「スゥンス」という語は、象徴的に、物事の中核をなす構成要素、精神、素質、精髓、本質をも意味する。たとえば、文章の「アミン・スゥンス（命の魂）」という表現は、文章の精髓を指している。ホルチン地方で、生靈をさらに、①「ゴル・スゥンス（中核たる魂）」、②「アミン・スゥンス（命の魂）」に分ける。これらの用語は、日常生活の中でそれほど細かく意識されないが、体調が悪くなると、意識され、ブオの病氣治療によって具現化される。病氣や驚愕によって、「ゴル・スゥンス」が体から離脱することがある。この場合、「アミン・スゥンス」が体にあるから命を保つことはできる。転生するのは、この「ゴル・スゥンス」である。「ゴル・スゥンス」は、人間の「真の自我、本質」と認識され、人の命は、「アミン・スゥンス」と考えられている。「アミン・スゥンス」が体から永遠に離脱することは、その人間の真の肉体的な死を意味する。人間を生かしている根源的な靈魂、すなわち、生命の精髓をアミン・スゥンスと称する。しかし、アミン・スゥンスは人間の本質を代表しない。代表するのは、「ゴル・スゥンス（中心たる魂）」である。

人間の生存を可能ならしめる根源は、アミン・スゥンスであり、アミン・スゥンスが体に実在しているからこそ、生命が存続することができる。ゴル・スゥンスが体から離れると、平常だと、アミン・スゥンスもまもなく体から出て行き、人間は死ぬ。しかし、ゴル・スゥンスが

体から出た直後、アミン・スウンスがまだ出ていないうちに、悪霊が取り憑くと、偽のゴル・スウンスになり、それに占拠される。そのため、患者は、本当の自我を失い、別の質のゴル・スウンスに翻弄されるが、生命は保持される。ゴル・スウンスは肉体を脱しているが、アミン・スウンスが体に残っているため、人は生き続ける。アミン・スウンスは生命の本質として理解することができる。たとえば、ホルチン地方でしばしば見られる現象がある。年寄りの患者が天寿を全うして、「ゴル・スウンス」が永遠に肉体を去っても「アミン・スウンス」が体に残っているため老人は行き続ける。ゴル・スウンスが体から離れた隙間に乗じて悪霊が入ってきて憑依すると、その人は、人間として、生きているが、本来のその人ではなく、悪霊の性質を帯びた存在となる。したがって、人間が生きている場合でもその人の性格、性質を持った本来のその人だとは限らない。したがって、老人の性格、言動に変化が現れる。さらに、昼はおとなしいが、夜になると起き上がって活動する。この変化に気づいた家族はブォの治療を求め、ブォが悪霊を追ひ払うと病者が息を引き取る、そうした事例がみられるのである。

上述したように、人間が生きているのは、この「アミン・スウンス」が身体中に存在するからである。しかし、「ゴル・スウンス」が体を抜け出すことは、「アミン・スウンス」の身体中の存在を揺るがし、したがって、生命力が弱体化され、遂に尽きる方向へ招く。すなわち「ゴル・スウンス」は「アミン・スウンス」、及び人間の生命をコントロールする。また、本人が生きているうちに、「ゴル・スウンス」が体から離脱して、新しい命として転生した後、「アミン・スウンス」が体から最終的に離脱することによって、本人が死ぬことがあるとホルチン地方で言われる。転生の概念は、魂を循環するものとして捉えている。墓や亡骸を守る霊魂は人間が亡くなり、肉体が腐敗して骨になっても、この魂は、そこに残って、霊的機能を果たすともなされる。

ここで、ゴル・スウンスに関する理解を深めるため、1つの事例を挙げる。

病者は通遼市のホルチン左翼後旗チョロト町TU村在住の1941年生まれ的女性である。2005年の春に肺がんと診断され、手術を受け、亡くなったのは、2006年6月である。女性患者の婚家は世襲型ブォ（シャマン）の家柄で、義理の従弟は現役ブォである。女性が亡くなった後、ブォである義理の従弟は、遺族に、次のように託宣した。「2005年7、8月に女性患者のゴル・スウンスはすでに体から永遠に離脱して世界を飛び回っている。この間、体に宿っていたのは、アミン・スウンスであり、患者の人格に変化が現れなかったのは、ゴル・スウンスの不在に乗じて、悪霊が侵入しなかったからである」。つまり、約10ヶ月間、女性患者は、ゴル・スウンスがない状態で生存していたのである。ブォの託宣によると、ゴル・スウンスが離脱した時点では、患者は天寿を全うしている。にもかかわらず、アミン・スウンスだけで10ヶ月間生き延びたのは、現代医療技術の進化によるものである。ブォの託宣に親族らは疑問を持たず、当然と受け止め、さらに、3人称で伝えた。親族らがブォの託宣を疑問視しない理由は、1つは、ブォが一族のブォであるから、もう1つは霊魂観に関する信仰基盤を本質的に共有しているからである。ブォが死者について「寿命から、さらに10ヶ月間生き延びた」とする託宣は、60代半ばの若さで世を去っ

たことに無念を感じていた遺族にとって、悲しみを緩和してくれる言葉ともなったのである。

横死した人の場合も、亡くなったという意味で「エルリグ（あの世）<sup>2</sup>に行った」と言うが、転生魂が転生できるエルリグに入ることはできず、人を煩わす悪霊になりやすいと言われている。いわば危険な存在である。横死など不自然な死を遂げた者をモンゴル語で、「ドルゴン・ウフデル（途中死、早死）」と言い、その霊を、「ゾールト」、あるいは、「ゾールティ・イン・スウンス」という。モンゴル語で、「ゾールト」という語は、「不十分、途中、間もない」などの意味であり、天寿を全うせず、途中で亡くなったということである。「ゾールティ・イン・スウンス」は、この世に彷徨う死霊のことを意味する。自然死を遂げた死霊も条件が変わると、子孫や他人に害を及ぼすとされるが、横死を遂げた人の霊と比べると、エルリグの世界ではるかに安定している。横死者の霊はエルリグの世界で不安定な状態にいる。この意味で、ホルチン・モンゴル人のイメージしているエルリグの世界には階層がある。つまり、自然死を遂げた死霊を取り扱う安定的な層と、非業に倒れた死霊が集まる不安定な層からなる。不安定な層にいる死霊はさまよい、落ち着きがないという本質をもつ。この世に留まり、たたりを引き起こしやすく、人間に憑きやすい。すなわち、悪霊になる。悪霊をモンゴル語で、一般に、「アダ」と言い、悪霊を総称する。不自然な死を遂げた霊が人に憑き、災いを及ぼす<sup>3</sup>と「アダ」と言い、その行為を「アダラホ」という。このような状態が現れると、ブォが患者に憑いている悪霊を取り離すことで病気が治る。守護霊に選ばれたメッセージとしての巫病の場合、善霊が病者を苦しみ、それを受け入れて、ブォになることで病気が治る。この意味で、アダは追い払う対象の霊で、後者は受け入れる対象である。

悪霊に憑かれた人間が病気になる。いわば、「憑き病」である。モンゴル語で「ナールドボルト・エブドチン（くつついた＝憑依された病気）」と言う。不自然に死んだ霊は、墓場、野外に飛遊し、偶然通った人に憑き易い。民間では、非業の死者の霊魂はエルリグに入ることができないので、世を彷徨い、人間の生霊を誘拐したり、体に侵入したりする。前者は悪霊が患者の体から出た生霊を左右し、後者は患者の体に入る。悪霊の目的は一つであり、病者の命をとることである。これによって、悪霊は、エルリグの世界に到着することができ、さらに転生を可能にすると考えられている。霊魂を非業の死者の、この世を彷徨う死霊が誘拐し、体に戻らせないようにする。もし、霊魂が本当に拉致されて、帰ってこない、患者は死んでしまう。この場合は天寿を全うした自然死ではない。不自然な死は穢れた存在である。柏原孝久、濱田純一の『蒙古地誌』に東モンゴルのシャマニズムについて、次のような記録がある。場所を明示していないが、ブォの世界観、霊魂観、病気治療、装束、道具に関する記述からすると、筆者の調査地であるホルチン地方の伝統信仰と非常に似ている。霊魂観に関する記述は次のようである。

又、薩満教の説くところに據れば、人の靈<sup>（マフ）</sup>魏<sup>4</sup>は生前の行事に因り、死後は鬼神と為るを得べし、且つ人は生存の時と雖も、夢寢の間に靈魂游飛す、魔神は之を捕獲することを

得、若し捕獲久しければ其人必ず死す、然れども薩満は之を魔神に祈願して其靈魂を還へし、其病氣を平癒せしむるを得べし、而して夢寢の間に靈魂肉體を離れて遠隔の地に遊ぶ時は、假令魔神之を捕獲せざる時と雖も、往々歸路に迷ひ、遂に復歸し能はざることあり、即ち人往々夢寢の間に頓死することあるは之が為なり（後略）〔柏原孝久、濱田純一（1919）2002：7〕。

この記述から読み取れる情報は、次のとおりである。人が寝ている間に生霊が体を離れて飛游する。世をさまよう悪霊が飛游する生霊を誘拐することがある。また、誘拐されると、生霊が胴体に戻ることができなくなり、時間が経つとその人間が死ぬ。悪霊に誘拐された生霊を、ブォは守護霊の力で取り戻す治療を行う。さらに、遠くへ飛游する生霊が帰路に迷ってしまい、戻れなくなると、本人は永遠に目覚めない。靈魂が誘拐され、道に迷う性格を有することを示唆する。ホルチン地方には、『蒙古地誌』が記録した靈魂觀と酷似した靈魂觀があり、この種の靈魂を取り戻す治療は、主にブォや患者の母親や祖母が行う。

ホルチン地方で、人が寝ているときに、靈魂、すなわち、ゴル・スウンス（中心たる靈魂）が体を抜け出て、世をさまようと言われる。寝ている幼児、特に乳幼児を部屋から移動させる際に必ず目を覚ませてからする。その際に、起きたらすぐ移動させず、5分から10分経ってからする。さて、なぜ、幼児が目覚めると、5分から10分を経ってから移動するかというと、体から抜け出た靈魂の帰還を待っているのである。「乳児の靈魂がまだその身体に慣れていないので、靈魂が戻って来たとき、靈魂が乳児を見つけられない恐れがある」〔チメド・ダホルナブチ 2005：278〕からである。

ホルチン地方では、靈魂の姿は、持ち主と同じ顔を持ち、同じ衣服を着ているが、一般人の目に見えない。体を持たない、気体のようなものであると考えられている。その姿をトランス状態に入らないでも透視できるブォもいれば、トランス状態に入ると見えるブォもいる。ムンヘナソン・ブォ（1927年生、男性、以下、ブォの名前はすべて仮名）は、「靈魂は3つあると言われており、実際に見たことがないが、60年経った墓も命を持つ（アミタイ）」と言って、死霊が生き続けることについて、2007年9月に、筆者に次の興味深いエピソードを語ってくれた。

義理の姉（兄の妻）が亡くなって60年数年に立っている。義理の姉が30代で亡くなり、兄はその後、前後2人の妻を娶る。兄が亡くなるときに、最初の妻と合葬するようわしに依頼した。兄が自分の子供に頼まないで、自分に依頼したのは、ブォだからである。わしは後継者として育てている甥（従弟の息子）と2人で、義理の姉の墓を掘り起こして兄の墓と合葬した。ところで、その夜から、夢に、義理の姉が生前の姿で頭のところに立って、自分をじっと見つめる。その後も4、5回、悪夢を見て苦しんだ。甥の夢にも義理の姉が現れたという。最初、義理の姉の霊が合葬されることを反対しているメッセージと理解していた。私たちは、ドトル・フーン（内なる人、すなわち、体に憑依している守護霊）がいるおかげで、平気だった。そうでなければや

られている（たたりとして不幸を被る）に違いない。タヤ(曾祖父、守護霊)を招いて義理の姉の霊を鎮める方法を教えてもらった。義理の姉が怒ったのは、義理の姉に対する尊敬が足りなかったらしい。きちんと事情を義理の姉に説明しないまま、勝手に墓を開き亡骸を動かしてしまったことに対する怒りだという。実は、甥は祈祷しなかったが、自分は多少事情を説明して祈祷した。しかし、それで十分ではなかった。義理の姉の霊を慰めるため、4種類の料理を作って、墓の前に供え、墓を勝手に移したことを謝り、鎮まってくれるよう祈願した。その後、夢に出てこなくなった。このことから見ると、やはり霊魂はいる。なければ、こんなことは起こらない。自分で経験して霊魂の存在を確かめた。

ムンヘ・ナソン・ブォの夢枕に立った義理の姉の霊は、3つの霊魂の中の墓を守る霊魂として理解することができる。墓を動かす際に、事情を説明しなかったために、義姉が夢枕に立ったことは、霊魂が生き続けていることを端的に証明しているとムンヘナソン・ブォは認識している。ムンヘナソン・ブォは続いて、「故老の話によると、人が死んで3晩過ぎると、真っ白な姿で人の目に見えることがある。それも実体験したことがある。兄が亡くなって間もないある日、2人の娘を連れて、麻黄<sup>5</sup>を取りに野原を馬車で走らせていたとき、わしは馬車に後ろ向きに座っていた。そのとき、亡き兄は体が真っ白な姿で5尺（約1.5m）の空に現れた。それをみて、『亡くなったのはご自分のせいなので、私にはどうしようもない。人前に現れて、「ハムグ・アミタン・ジルガン・ズイル」<sup>6</sup>（一切の六道の有情）を怖がらせないでください。早くエルリグ（あの世）に帰りなさいと思った』と、言いたかったが言い出せなかった」と語った。このエピソードから、ムンヘナソン・ブォが、自分が聞いた故老の話が本当であることを確認したばかりでなく、霊魂を人格化された存在として考えていることがわかる。

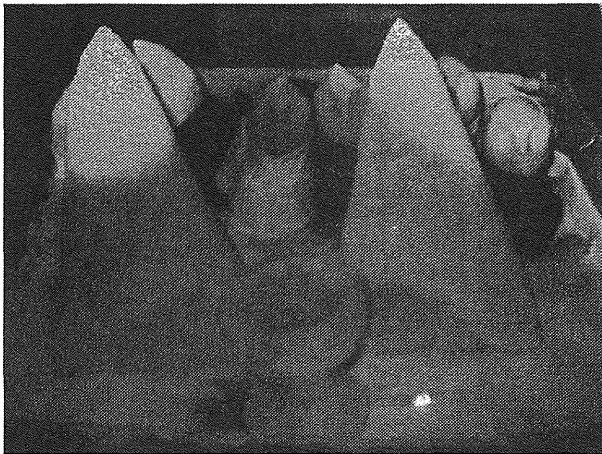
悪霊払い治療において、ブォは、患者に取り憑いたのが、3つの霊魂のどれか、また、アミン・スウンス（生命魂）か、ゴル・スウンス（中心たる霊魂）かと具体的に告げるのは稀で、人間の霊か、あるいは動物の霊かを伝えるのみである。

## 2. 悪霊の概念と悪霊増加の原因

ホルチン地方では、「ブォは悪霊を抑止し、ラマは人の霊をエルリグ（あの世）の世界に導く」と言われるが、ブォによって、エルリグに送り届けることができる人もいる。普通の人の霊が人を災いしない。非業の死に倒れた霊、たとえば、喉を切る、井戸に落ちる、首を吊る、薬を飲む、交通事故、水死した人の霊がヒリス・スウンス（異常死者の霊、怨霊）なので、エルリグも受け入れず、代わりにもう1人を犠牲にしないとエルリグの界はいることができない。そのため、人が首を吊って自殺を図った樹を切り倒す、あるいは燃やすのはその樹にもう1人の犠牲者が出ないようにしているからである。人が死ぬ事故が発生した場所に、いつも事故が発生して人が死ぬことが出る。このような場所を「エリヤン・タイ・ガジャル（障り場所）」という。虐待され、恨みをもって死んだ人の霊が人間に災いを与える。自然死を遂げた人の霊魂は、通

常、人間に害を与えない。法力のないラマはできないが、法力があるラマは経を唱えてこれらの霊をエルリグに送ることができる。プォによっては、守護霊の力で悪霊をエルリグの世界に送り届けることもある。民間では、非業の死者の霊魂はエルリグに入ることができないので、世を彷徨い、人間の生霊を誘拐したり、体に侵入したりするとされている。前者は悪霊が患者の体から出た霊魂を操作し、後者は患者の体に入ることである。悪霊の目的は一つで、患者の命をとることである。これによって、悪霊は、エルリグの世界に到着することができ、さらに転生を可能にすると考えられている。

ホルチン地方のプォたちが考えている悪霊の概念について、さらに詳細に紹介したい。再活性化しているホルチン地方のシャマニズムの1つの特徴は、プォの治療を求めるクライアントの増加である。その中で、病因を悪霊の憑依によるものと診断されることが増加している。そこで、現在、なぜ、悪霊に憑依される病者が増加するのか。まず、プォがどのように考えているかを見てみることにする。



#### [写真説明]

患者から切り離した悪霊をソルと呼ばれる3角の玉蜀黍の粉で作った物体に乗り移らせて、あの世に送り届くプォの治療。人形は、悪霊の護衛兵である。玉蜀黍の粉で作った香炉にサラダ油を注ぎ、点火して、悪霊に供える。

#### (1) 悪霊が増える原因

悪霊が増加する原因について、ムンヘナソン・プォは、「開放という政策を打ち出したため、狐、鼬の精霊など動物の悪霊、不慮の死を遂げた人間の死霊がみな出てきた。しかし、それらを鎮める我々プォも多く出てきた」と語る。すなわち、ムンヘナソン・プォが改革开放政策を実施し、宗教政策が緩和されたことで、霊的な存在、すなわち、善霊と悪霊の活動が活発になったと主張し、政策が霊界の存在の活動にも影響を与えていると考えている。ラシ・ホンダン<sup>7</sup> (1926-2009) は、「(ホルチン・プォの元祖と言われる) ホブグタイなどホルチン地方の法力があるプォたちの霊が鎖で縛られている<sup>8</sup>。それが切れる時期がなったためプォたちが大勢に出てきて活躍している。それにつれて、悪霊の活動も活発になる。プォが増えても悪霊が増えないとプォの存在する価値が示されない。悪霊が増えるとプォ達がそれを駆逐して、我々の存在感を示すことができる」と述べた。すなわち、現在は、縛られていた亡きプォ達の霊が自由になる時期がやってきたため、プォが増え、それに従って、悪霊も増えたと主張している。オニソ・ブ



ォは、「現在は、5のシブフンの時期で、守護霊と悪霊が大いに出てきて盛んに活動する、混乱した時代であると考えている。ブォの中に悪霊の中で、墓に起因する病者が多いと語る人が少ない。たとえば、死後霊魂を導かれなかった霊魂、悪い死（モーヘイ・ガル・ウフッセン）を遂げた霊魂がある。また、驚愕による悪霊の憑依も見られる」と語った。

以上に挙げた説明は、現在、ホルチン地方で活躍する現役のブォ達が悪霊に取りつかれる患者の増加の原因について、ホルチン地方のシャマニズムの世界観の中に問題をとらえている。霊界の霊の善と悪の二元論的存在を強調し、悪質な霊の存在こそが、ブォという善なる存在の価値が認められると考えている。次に、現実の社会問題と考えているブォの説を見てみよう。イテゲル・ブォ（1929年生、男性）は、次のように語る。「患者に悪霊が憑いていなくても悪霊に憑かれたと説明して治療を行って治癒させることもある。ブォの中にこのような説明の仕方を取る人が少なくない。わしの治療を求めて訪ねてくる患者の半分は心の問題を抱える人たちである。精神的苦悩が原因で、残りは、悪霊に取りつかれた患者である。このように精神的に問題を抱える患者にサイグ（呪薬）を服用させて治療する。白い布に押印し、燃やして灰を、①旧暦の5月5日の蓬、②柳の葉、③干生姜、④大根、⑤砂糖をドウジン・オス（初水）<sup>9</sup>で煎じ、その湯で飲む。2、3日から7日に服用すると治癒できる。精神的に苦悩を抱える人の五臓六腑、すなわち、心臓、肝臓、脾臓、肺像、腎臓が「熱い」状態にあるので、呪薬を服用することで熱さを追い出す」。イテゲル・ブォの語った病因から見ると、精神的苦悩が不調として現れると言うことで、それを治療するには、守護霊の力が入った、押印済みの白い布の呪薬で、それを生薬の煎じ湯と飲むことで平癒する。すなわち、精神的な問題を治療する際に、守護霊の力と生薬の力に頼っている。イテゲル・ブォによると、5つの副薬（フルグ）は、痛みの原因となっている体の熱さを追い出す力があるという。イテゲル・ブォは、患者が具体的にどのような問題を抱えているかについて説明しなかったが、病因を社会問題と考えている。悪霊が増加の背景には、苦悩や苦痛を抱える人の増加がある。体内部の痛みの原因を外部の悪霊に回収されている。

もう1つは、ブォは、クライアントから謝金を取る目的で「悪霊」を利用していると言われている。それは、クライアントに悪霊が憑いていないのに、悪霊が憑いていると診断し、さらに、治療を受けないと不幸に遭遇すると脅かし、治療を施して、謝金を受け取っている現象が存在している。これ以外、現在、自然資源の開発によって、環境や自然の破壊によって、そこに棲みついている自然の精霊の居場所が悪くなり、あるいは失われたことによって、人間に災いを与えているという解釈もあり、行為者、または、元気がない人に取りやすいという。このように、①悪霊の増加を霊界の悪霊の動的存在によるものとみる信仰に基づいた解釈、②治療の便宜による解釈、③自然の破壊による解釈、④ブォの金銭的動機による解釈が存在する。

## (2) 悪霊の概念

日本では、人間の生霊が他人に崇りを与えることがあるが、ホルチンでは、人間の死霊にし

かみられない。また、狐、鼬、蛇の生霊・死霊の祟りを受けると考えている。上述したように、悪霊を基本的に、アダと称するが、それ以外もさまざまな表現がある。

## 1) 悪霊を構成する語彙群

① アダは、悪霊の総称である。悪霊の種類によって、

a. イリヨ・アダ (①1950年代以前、新婦に憑依する悪霊、②ブォが意図的に女性に憑けた悪霊を指す)

b. ウフゲル・アダ(墓の悪霊)などに分類される。

② チュトゲル、また、アダ・チュトゲルとも言われる。

③ ユム (もの、悪霊)、ユムは、直訳すればものを指す語だが、文脈によって、悪霊を指す。また、モー・ユムで穢れたもの、悪いものを指し、セイン・ユムで善なるものを指す。

④ ボン、bog,bongという2つの発音がある。

a. ボソ・ボン (体を持った悪霊)。

b. ヒー・ボン (体を持たない悪霊)。

⑤ ニルハス (捨て子の化け物)。

⑥ ホロラッチ (祟り者)、上に挙げた悪霊は基本的に祟り者に属するが、それに加えて、守護霊の祟りという意味のオンゴドン・ホルラルという熟語がある。オンゴドン・ホルラルと言えば、巫病のことを指す。また、ブォが自ら、あるいは依頼者の依頼を受けて特定の相手に祟りを与えることを意味する。

## 2) 悪霊になりやすい霊たち

悪霊の種類について、ブォ達が色々と考えている。オニソ・ブォは次のように理解している。

① ガジャル・オスン・ネ・アダ (地と水の悪霊)、これは、自然の悪霊である。

② ヒー・ボン。ヒーとは、「空気、気」という語で、すなわち目に見えないということである。ボンとは、死んだ人の霊が人間や家畜に被害を与えること指す。ヒー・ボンとは、体をもたない悪霊という意味である。目に見えないが、行為が形として現れる。誹謗中傷されて死んだ怨霊がヒー・ボンになる。

ホルチン地方の老人たちは、ニルハスなる悪霊を知っている。かつて、未婚のまま出産した乳呑児を生きたままに遺棄することがあった。話によると、普通、名前をつけてから捨てるが、名前をつけずに捨て、悪霊となったのが、ニルハスである。夜になると、幼児の泣き声が聞こえて、満身に産毛が生えた嬰兒が人の目に見える。民家の窓の外に朝起きると赤子の足跡が残っているという。ムンヘナソン・ブォは、自分は見たことがないが、声を聞いたことがあるという。現在、ニルハスがなくなったのは、電気のおかげだと語る。電気は5つのチャヒルガン(発光源)の1つである。悪霊は光から怖がるため、出てこなくなった。5つのチャヒルガンは、雷、電気、拳銃、火、爆竹である。

イテゲル・ブォは、悪霊として、①フヘル・アダ (墓の悪霊)、②ガジャル・オスン・ネ・ア

ダ（地と水の悪霊）、③ヒー・アダ（すなわち、ヒー・ボンである）の3種を考えている。韓美芝  
ブォによると、「ガジャル・オスン・ネ・タブン・アダ」（地と水の5つの悪霊）がいる。それは、  
チュトゲル（死霊）よりは、力が強いが、仏（ここでは、ブォの守護霊）より力が弱い、両者  
の中間の存在で、人間の死霊ではない。この5つの悪霊は人間に憑依して、人を病気にすること  
ができる。また、不幸にあわせることができる。しかし、ブォによって、その本質を見抜く人  
がいれば、見抜けない人もいる。見抜けなかった場合、それを死霊として扱い、説明すること  
がある。たとえば、家畜が急に病気になって死んでしまうことがある。その場合、「地の棘（ガ  
ジャル・イン・ウルグス）」に襲われたと判断し、地と水の悪霊の仕業と看做す。地と水の悪霊  
は人間を襲うこともある。

近年、ホルチン地方で、病因を狐と鼬の悪霊に取り憑かれたせいと判断される病者が、しば  
しばみられるが、ブォ達が語る悪霊の種類の中に、狐と鼬の悪霊が見られない。その理由は、  
かつて、狐や鼬の悪霊がホルチン・モンゴル人に憑依することが少なく、悪霊の種類に入れて  
考えるほどではなかったからであろう。筆者は悪霊の種類について、ブォ達から聞いたのは、  
2005年以降のことである。ブォ達が、狐、鼬の悪霊のモンゴル人に憑依の増加を意識しながらも、  
それを語らなかったのは、ブォの理解している悪霊のカテゴリーにまだ十分に定着されていな  
いためだと思われる。

これ以外、ホルチン地方で「アリマン・ネ・ホルラッチ（アリマンの祟り）」と呼ばれる悪霊  
が存在する。韓美芝（1928年生、女性）ブォによると、野外に使い捨てられた箒、ぼろ靴、骨が  
日に当たらず100日経つと、この種の悪霊になる。また、野外に放置された人間や動物の骨に生  
血が滴るとアリマ（悪霊）になり、人間に憑依して災いを引き起こす。普通の場合、1つのアリ  
マでは力が弱いので、数個のアリマが一体になって、人間に憑依して苦痛を与え、誘拐するこ  
とができる。ブォは、アリマンの数を見抜くので、その数でアリマンを呼ぶ。数が増えるほど、  
力強くなり、与える被害がひどくなる。箒、靴、骨が悪霊になる恐れがあり、箒と靴、骨を捨  
てる時、破壊して捨てるのはそれが原因だという。筆者は、子供の時代に野外で夜になると、  
火の玉が跳ねて飛んでいるのをよく見かけた。当時、正体が分からず、非常に怖かった。一緒  
に歩いていた母方の叔母に尋ねると、「アリマン・ガル（火）」で、後を追って遊んではいけな  
い、どこかへ連れて行って道に迷わせると注意した。1人か2人で道を歩いているうちに迷って  
しまい、近くに火を囲んで人が話しているように見え、行ってみたら何もなかった。引き続き  
歩くとまた同じ光景が見える。このように目的地から全く別の方向に行ってしまったというエ  
ピソードを子供の頃よく耳にした。その原因を人々は、「アリマン悪霊」に帰した。中学校の時、  
高校で理科を習う従姉（父方の叔父の娘）が、『「アリマン・ガル」は、実は、燐火で、箒、靴  
や骨が捨てられて日が経つと燐を発して、燐火になる」と説明してくれた。「アリマン・ガル」  
が発生する原因を科学的に説明されても、ホルチン地方の住民は現在も悪霊として思っている。  
「アリマン・ガル」の概念が根強く息づいており、病気や不幸の原因と説明することがいまだに  
見られる。また、燐火に、悪霊が憑いて行動しているかもしれない。

### 3. 悪霊の処置

ホルチン地方で、ブォが人間に取り憑いた悪霊を基本的に、①無理やり追い出す、②要求を満足させ喜ばせて追い出す、③脅かして追い出す。なかなか離れたがらない悪霊、あるいは、追い払っても繰り返して取り憑く悪霊を、強力なブォは「雷を落とす」と脅かす。イテゲル・ブォによると、靈魂は、不滅であるが、ブォは守護靈の力、天の力によって、過激な悪霊を完全に消滅させることができるという。それは、火で燃やすか、雷を落とすことである。雷を落とすという語の背後には、悪霊を完全に消滅させるという意味が潜んでいる。肉体が減びても、靈魂が靈界で生き続けるという靈魂に関する基本的な概念から考えると、この説は矛盾していると思われるが、ある力を加えることで消滅させ得るという考えもある。ホルチン地方のブォの中で、悪霊に与える罰の中で、「雷を落とす」という措置は最も過酷な方法とされる。悪霊の存在する権力を完全に奪ってしまうからである。悪霊は生き続けたいので、おとなしくなって、患者の体から出て行った後、簡単に憑依しないという。ボヤント・ブォは、狐、イタチを駆逐するとき、「二度と来てはいけない」、すなわち、患者に再び憑いてはいけないと（患者の口を借りて）悪霊に誓わせる。もし、約束を破ると、雷（チャヒルガン・チャガン・テングリ）を落とすと恐喝する」という。悪霊を追い払う際に、ブォ達がこのように脅かすのは、もし、本当に雷を落とされると、消滅してしまうから悪霊は怖がって再びその病者に憑依しないと考えられている。家畜などが落雷に当たって、命を落とすことがあるが、それは、自己の意志によるものはないので、肉体が減びても、靈魂は生き残ることができると考えられている。ホルチンでは、かつて、ブォが雷にうたれた死んだ家畜を再生させる儀式を取り仕切った。

ホルチン地方では、強力なブォは天候を操ることができると信じられている。ホルチン左翼後旗GA町在住の玉花（1972年生、女性、高校の教師）によると、子供の頃、村に住むブォが同じ村のある人の家を訪ねて来た。雑談中、家の主人は「ブォ達はテングリを呼び、雷を落とすことができると言っているが全くの嘘でしょう」とからかった。それを聞いたブォは外に出た。間もなく、雷が鳴り、ブォの掌で火が燃えているようだった。ブォは、男性に「どうするのか」と質問した。男性は恐れ、跪いて許しを請った。ブォが掌をひっくり返すしぐさをすると、家屋の西側にある森に火と共に雷が落ち、数本の樹が燃えたという。このエピソードはブォが悪霊に対して、雷を落とすと脅かすのは、口だけでなく、守護靈と天の力で実行可能だということを物語る。

悪霊は靈的存在なので、患者から追い出されても引き続き活動することができる。ブォは、患者の体から悪霊を取り出した後、それをどのように処理するか。筆者が現在、入手した第一次資料から見ると、基本的に、次のいくつかの方法を取っている。①患者の体から取り出した後に、どこに行くかは悪霊の自由意志に任せる。②横死者の靈の場合、あの世の主のエリグ・ハーンにあの世に連れて行ってもらうことで転生を促す。また、寺院で読経してもらい悪霊をエリグの世界に導く。③期間限定で抑え鎮める。3、5、10年と様々である。④永遠に抑え鎮めておく。もし、悪霊を永遠に封じて置くと、一切、転生できなくなるので、ブォはめった

に行わないと言う。しかも、(仏教に順応した) 白い方向のブォは、決して執行せず、(仏教に順応しなかった) 黒い方向のブォがすると、ホルチンのブォ達が語る。周知のように、シャマニズムは、仏教のように統一した経典がないので、治療に個性が見られる。月亮ブォは、悪霊を鎮めて置くやり方を師匠のホブル・ブォに教わったことがあるが、実行したことがない。基本的に、患者から悪霊を切り離すだけで、その後の悪霊の行く先に手を出さない。⑤悪霊をブォが自分の補助霊に置き換える。月亮ブォによると、病者に取り憑いた悪霊の力が強い場合、ブォは、守護霊の力でそれを降伏させ、補助霊として病気治療などに協力させる。これによって、悪霊は善なる補助霊に変身する。しかし、このようなことはごく稀にしかないという。次に悪霊の活動とそれに対する処置について具体的な事例を紹介する。

#### (1) ヒー・ボンの鎮め

白虎ブォが21歳(1982年)のときに、家から40Km離れたSHA村に、夫が村長だった未亡人に2人の娘、2人の息子がいた。夜になると、窓の外側から、「ヘイ」と声をかけ、窓を叩く音がある。未亡人は、意地の悪い人が2人の娘を乱暴しようとしていると思った。続いて、昼間、理由もなく石や土の塊が家に投げ込まれるようになった。外へ出てみると誰もいない。未亡人は北東の方向に住む「ヨル・ショル・イン・テングリ(運が悪い人の拝む天)」を拝み、加護を求めた。ところが、その後、窓を叩く、石や土の塊が投げ込まれる事件がもっと頻繁に起こるようになった。仕方がなく、警察と村長を家に招き、調べてもらったが何も見つからなかった。警察は、他のあらゆる手段を使って、犯人を捕まえてもよいと伝えた。ちょうどそのときに、未亡人は、村人から白虎ブォの存在を知った。白虎ブォは、「ヒー・ボン」による行為と判定し、追い払うためその家に向かった。クライアントがもてなしの料理の支度中、鍋に豚の糞が投げ入れられ、食卓にも投げ込まれた。白虎ブォが太鼓を数回叩くと豚の糞が入ってこなくなったが、他の居室に投げ込むようになった。白虎ブォがその「ヒー・ボン」を捕まえて、蕎麦の粉に乗り移らせ、T字路の中心で燃やし、消滅させた。以後、今日にいたるまで、その家に2度とこのような出来事は起こらなかったという。

これは、典型的な「ヒー・ボン」を退治した事例である。「ヒー・ボン」と呼ばれる胴体を持たない悪霊が普通の人の目に見えないが、行為は見える。この事例で夜、窓の外側から声をかける、石や土の塊、豚の糞を投げ込むのは、この「ヒー・ボン」の仕業である。多くの場合、悪霊は人の体に忍び込み災いを引き起こすが、「ヒー・ボン」は、人間に直接に憑依しない。霊界にいながら眼に見える形の被害を相手に与えることができると信じられている。

イテゲル・ブォは、「ヒー・ボンの鎮め方は師匠から教わったことがあるが、ヒー・ボンにまだ会ったことはない」と話すと、ドルジ・レイチン(1936年生、男性)<sup>10</sup>は、「ヒー・ボンが、昔は多かったのは、風水の力が強かったからである。現在、昔のように風水が強くないので、悪霊も強くない」と語った。ドルジ・レイチンは語りの中で、「風水」と中国語で言った。ここに、

3つの問題が潜んでいる。1つは、風水の指す内容、次に、現在の風水の衰弱の原因、そして、なぜ「風水」が強ければ、ヒー・ボンの力も強いかという問題である。ドルジ・レイチンの言う「風水」とは、地霊と水の霊を指しており、人口の増加、開墾、開発などで、傷つけられたため、力が弱くなったという意味である。肉体を離脱した霊魂は地霊と水の霊から力を得て、自らの力を強化する。そして、その活動も激しく、与える被害も大きいと言われる。現在、地と水の霊の力が弱まったため、悪霊がこれらから得る力も弱く、したがって、その霊力も昔のように強くないため、活動も盛んではないという意味が、ドルジ・レイチンの語りには含まれている。

## (2) ボソ・ボンの鎮め

ホルチン地方で、年を取った人が、昼間寝て、夜起き上がって行動し、歩き回っていると耳にすることがある。この現象を家族とブォが老人の魂がすでに体から離脱しており、体を悪霊が占拠し、命はあるが、人格は悪霊の人格を持つと認識する。離脱した患者の霊はエルリグ・ハーンによってあの世に収められるが、肉体が悪霊に取り憑かれた状態である。本人はすでに死んだ、すなわち、中心たる霊魂であるゴル・スウンスが離脱していることである。ブォがもし、その悪霊を追い払うと老人が死ぬ。この場合では家族が話し合って、ブォに頼んで、悪霊を追い払ってくれるよう頼む。家族全員が同意するとそれを実行することが出来るが、1人でも同意しないと実行できない。老人をブォの関与によって死なせることである。もしそれをしないと、「ボソ・ボン」になる危険性がある。ホルチン左翼中旗在住の包月季ブォによると、天寿を全うしてゴル・スウンスが体から離脱し、まだ生存中に悪霊が忍び込こんで、人格が変わる病気をホルチン地方で、ハララホ（暗くなる）病気と言う。病者を「ボソ・ボン」と称する。「ボソ」と言う語は、立っている様。モンゴル語に、「ボソ・ベイ」と言う語があり、「立っている人（体）」の意味である。「ボソ・ボン」は、命がある人間に悪霊が取り憑くと人間ではなく、体をもった悪霊と言う意味になる。ゴル・スウンスが体について、上から悪霊が入ってくると、その人の人格は完全には変わらないが、変化は生じる。アルコール依存症、精神病、家族を罵倒する、怒りっぽくなるなどの症状がある。ゴル・スウンスが出て行った後、悪霊が侵入した場合、人格が質的に変化する。ずるい悪霊は家族に知らせたくないためできるだけ、元の人格にあわせようと努めるといふ。

「ボソ・ボン」をまた、「アミド・ベル・ブトフ（生きたまま化け物となる）」と言う。もし、「ボソ・ボン」になると捕まえることが出来なくなる。「ボソ・ボン」を鎮めるには、ブォによって、患者と面会する人がいれば、しない人もいる。ホルチン左翼中旗在住のブレンテグス・ブォ（1923 - 2009、男性）によれば、ブォに、家族が、老人の生年月日とこの世から立ち去らせる日を教えると、ブォがそれを実行する。老人がブォと面会する必要はない。遠隔操作が可能である。また、ボソ・ボンとなった病者の前で行うこともある（呪薬を服用させる）。この治療を「ボン・ダロホ（ボンを鎮める）」、あるいは、「ポログ・ヒフ（破壊する）」、「グルム・ガルガホ（グルムを出す）」と言う。「グルムとは、チベット語であり、仏教において、悪霊、災害

を除去するため読経する習俗である」[ボ・ソド 2001：236]。この悪霊に肉体をのっとられた人は、もう人間ではないと認識される。この治療には、患者の体を占拠した悪霊を追い払って放置せず、悪霊が再び人に取り憑かないよう、抑えておく。一般のブォには出来ないが、力が強いブォには出来る。

#### 【ボソ・ボンを鎮めた事例1】

治療者ブォ	時間	クライアント	症状
治療者：包月季の師匠ナンデン・ブォの師匠である杏花（1961－2001、女性）、付き添い：ナンデン・ブォ、包月季ブォ（1968年生、女性）	2001年	70代の女性	振る舞いに異変が生じた。

ここで、もう1つの事例を見てみよう。包月季・ブォの語ったエピソードである。

2001年に、東ホドグという村のある人の母親が70歳を過ぎており、昼は寝て、夜になると、外に出て歩き回る。家族は、母親のゴル・スウンス（中心たる魂）が体から出て、世をさまよっているうちに、悪霊が侵入してしまい、性格が変化したと理解した。包月季ブォの師匠の師匠である杏花は、病者の家族に、母親は天寿を全うしているため方法としては、侵入した悪霊を追い払い、母親の靈魂を体にきちんと戻してから息を引き取らせると伝えた。もし、死んだら責任を問うかどうかと訊くと、家族から問わないと確固たる返事をもって治療を実行した。杏花らはその家から出て、3時間後に病者は亡くなったという。病者が天寿を全うしたが生き続けるのは、悪霊が体に侵入したからである。杏花は、守護霊の力で悪霊を追い払い、体から出て行った靈魂（ゴル・スウンス）を呼び戻したが、病者は寿命が尽きているからまもなく亡くなった。これは、ホルチン地方で、最も恐ろしいと言われる「ボソ・ボン」を追い払った事例である。病者が昼寝て、夜になると活動するのは認知症の特徴であり、病院で受診させたら、認知症と診断されるかもしれない。しかし、ホルチン地方では、病因をゴル・スウンスが体を離れたことに帰する。ホルチン地方で、人や動物が年を取り性格やしぐさが変わると「ジン・ブトベ」と言われる。また、人や家畜が「ジン」になることから恐れる。「ジン」とは、中国語の「妖精」の「精（jing、ジン）」で、モンゴル語に入って「化け物」という意味になった。「ジン・ブトベ」は、「化け物となった」と言う意味である。すなわち、性格や言動が変化したことを示す。年を取り、天寿を全うして、ゴル・スウンスが体を離脱し、まだアミン・スウスン（生命魂）が体に残っている隙に悪霊が侵入して、悪霊の人格になったと説明される。

#### 【ボソ・ボンを鎮めた事例2】

2000年のことである。かつて白虎ブォと同じ村に住み、年を取って他の村に移住した、100歳過ぎの老女がいた。すでに抜けた歯が再び生え、昼間は病臥し、夜になると全裸になって行動する。冬の夜、凍った饅頭を鏡で顔を見ながら食べ、寝ている家族の頭を撫で、外に出て庭の

壁に沿って歩く。白虎は、ゴル・スゥンス（中心たる魂）の離脱と悪霊の侵入と診断した。蕎麦の粉で人形を作り、老婦の体に取り憑いている悪霊を乗り移らせて、T字路で燃やした。10分で終わったので、あまりの速さにクライアントが驚き、きちんとしていないではないかと疑った。このような儀式を行うと、夜明けまで寝てはいけないというタブーがある。白虎ブォは病者の家族とずっと酒を飲み続け、翌日、帰宅した。2日後に老婦人は死んだ。偽物のゴル・スゥンスである悪霊を追い払ったので、ゴル・スゥンスがない状態となり、結局、アミン・スゥンス（生命魂）が体から離脱して、命が尽きたということである。このような治療で、悪霊を追い払った後、季節を問わず雷鳴がとどろき、落雷が見られることもあり、そのいわれは知らないが、落雷は、悪霊が鎮まったことの証明だという。白虎の病気治療に、常に随伴している次男がそれを「オンゴット・ネ・ガル（守護霊の火）」と説明した。すなわち、守護霊が悪霊を鎮めているのである。

「ボソ・ボン」の特徴は、次のようである。①病弱の年長者は、生存中だが寿命は尽き、ゴル・スゥンス（中心たる魂）はエルリグの世界に赴いた。②まだアミン・スゥンス（生命魂）が体から離脱していない隙に悪霊が取り憑く。③非業の死に倒れた霊が病弱な高齢者に憑きやすい。衰弱状態で、魂が体から離れやすいため、その隙を利用する。④悪霊に憑かれた患者は、昼間はいつものと変わらぬ病弱の状態にいるが、夜になると悪霊の性格を持ち、異常な行動を起こす。すなわち、悪霊は昼間に弱く、夜に強いというホルチン地方の観念を示す。

### （3）転々と憑依する悪霊

#### 【事例1 祭られなくなった精霊が憑依してまわる】

翡翠ブォ（1966年生、女性）によると、周辺の村に陳名字の漢民族がいて、代々、狐の精霊を祭っていた。しかし、2007年の秋、別の村に移住する際に、狐の精霊をきちんと連れて行って祭らず、陳一家は狐の精霊を祭祀することを中止した。神として祭られていた狐の精霊は祭られなくなり、食べるものがなくなったので、よその人間に憑依して迷惑をかけ、神から悪霊に変身した。現地のブォがそれを追い出すと患者が治った。しかし、狐の精霊は別の村の人に取り憑いて煩わした。このように、この狐の精霊は、追い出されると次の人に憑依し、転々と人に憑き苦痛を与えている。翡翠ブォは、この問題の原因は、狐の精霊を満足させていないことと、患者から追い出した後の措置をしかるべくしていないことが原因と分析する。これを解決するには、陳一家が狐の精霊との縁を復活させ、引き続き祭るしかない。もし、陳一家が、再び祭ることを拒否したければ、狐の精霊の別の要求を満足させてやることである。もう一つは、力があるブォがそれを永遠に鎮めて置くか、期間限定で抑止して置くことである。悪霊を抑止して置くことを「ダロズ・タルビホ（押さえておく）」と表現する。悪霊を鎮めておく一連の処置にホルチン・シャマニズムの信仰が端的に表現されている。一般的に鎮めておくというと、地下をイメージするが、ブォたちは、必ずしも地下に鎮めたと考えず、活動を禁止しただけと言う。イテゲル・ブォは、悪霊が永遠に出てこないようにする方法を次のように述べた。



悪霊を再び出てこないようにする方法を「ウヘル・イン・アマ・ダルホ（牛の口で鎮める）」と称し、3本の道路の交差する場所に穴を掘り、犬と馬の頭蓋骨を入れて、紐が7アルタ（両手を広げた長さ）なら、7本の柏の木で作った釘を、9アルタなら、9本の釘を紐に刺して、犬と馬の頭蓋骨に結び、3個のゆで卵を3本の道路の交差点に置く。また、7つの泉の水（7つの井戸の水でもよい）を頭蓋骨のそばに置く。「頭蓋骨となった馬が鳴く時、頭蓋骨となった犬が吠える時、ゆで卵から雛が出てくる時に出て来てください」と悪霊に言い聞かせる。出てこないでほしいということである。オボー<sup>11</sup>に動物の頭蓋骨を含めた骨を捧げる習慣があるが、悪霊を鎮めるため使われる頭蓋骨のもつ意味が異なる。オボーに捧げた動物の頭蓋骨は敬意の表現である。悪霊を出てこないようにという願いを込めて、馬と犬の頭蓋骨に再び肉がつき、蘇る時に出ててくるよう悪霊に言い聞かせている。すなわち、ここでは、霊魂の再生ではなく、治療に使われた頭蓋骨の減じた肉体の再生を表現している。それが不可能という実践知がここで働いている。イテゲル・ブォによると、柏は松を象徴しているという。

イテゲル・ブォが語る3本の道路の交差する地点とは、T字路を意味し、道の境に悪霊を鎮めておくのである。道の境は、人間のほか、善霊と悪霊の通り道である。そこに鎮めておくこととどの方向へも逃げないという意味である。頭蓋骨が蘇生して、走りだしたり、鳴きだしたりすることは永遠に不可能である。ゆで卵からも雛が出ることはない。悪霊が再び出てきて来ないでほしいという願いが、これらの頭蓋骨とゆで卵に託されている。この事例に関連して、筆者が2007年にジャロード旗で聞いた話を述べる。2005、2006年の時、ジャロード旗ORANソムのある山の麓に灰色のレンガ（かつて多く見られる）造りの墓を、一人の若者が偶然発見した。貴族の墓ではないかと思い、2人の仲間を呼び、盗掘を行った。開けて見たところ、亡骸の頭のあたりにホレ・バダ（黍の煎り米）を散らし、上から花柄の碗を被せてあった。3人の若者が碗を取って帰る途中、3人とも変な言葉をしゃべりだした。「ホレ・バダに芽が出たら、出してくれると言って、わしをここに騙して連れてきた」と。さらに明朝（1368—1644）の時代のことを話したという。家族は、ブォを招いてきて追い払ってもらった。現地の人々は、死者は生前、悪行三昧だった人か、伝染病で死去した人と推測した。ホレ・バダに芽が出ることはありえないので、死者の霊が永遠に出てこないようにとの意味であろう。この事例は、すくなくとも、ブォが死者の霊が出てこないように鎮めて置く場合もあることを物語る。

## 【事例2 愛情の表明として子孫に憑依】

自殺をはかった母方の祖父の死霊が孫（娘と息子）に憑依する。

2002年にラシ・ホンダン（1926-2009）と同じ村に住む呉英梅（1973年生）という、若妻の精神が異常（ソリヤト）となり、ときをかまわず外を走り回るようになった。多くのブォに診てもらったが効果がなかった。後に20km離れたエルセンという村に住む、海峰というブォの治療を求めていくと、「なぜ、『箆笥を探さないで村を探しているのか』。同じ村に住む老ブォ・ヨーヨ（祖父）に見てもらいなさい」と言われた。老ブォ・ヨーヨとは、ラシ・ホンダンのことである。

ラシ・ホンダンが神具を取り出して、針で患者の鼻を刺すと、患者の体に取り憑いているユム（悪霊）が話し出した。言葉つきは女性らしいが、身振り、口ぶりが明らかに患者本人と異なる。悪霊は、次のように語った。「わたしは、文化大革命の時代、エルセン村の公社書記でしたが自殺しました。娘がとても可愛く、孫娘を娘のように愛しく思って、孫娘に憑きました。孫娘に害を与えようと思っていません」。ラシ・ホンダンはこれを聞いて、「君が憑いたせいで、お孫さんが狂ってしまい、日常生活が出来なくなった。絶対、離れなさい」と怒鳴って追い払った。治療後、女性患者は正常に戻った。しかし、2日後、別の村に住む実の弟が女性と同じ症状となり、家族が祖父を招きに來た。女性から追い払われたその祖父の霊が、今度は女性の弟に憑き、祖父（ラシ・ホンダン）が同じ方法で追い払った。家に帰ってくると、再び女性に憑依し、異常を示した。祖父は、悪霊に対する態度がやさしすぎたのが原因だと思い、剣や針を病者の体に刺し、また、銅製のオンゴットを頸に21日間かけさせた。悪霊を「また憑くと雷を落とす」と脅し、今後、憑依しないと誓わせた。それ以降、女性と弟は元気になり、もとどおり家事と畑仕事をこなしている。「雷を落とす」と、悪霊は完全に消滅する。

この事例は、孫を可愛がって体に憑依した例だが、では、なぜ苦しめるのか。この事例に登場する霊は、夭折者、異常死者であり、ホルチン地方の靈魂観において、悪霊になりやすい存在である。それが人に憑くと悪霊になると考えられる。異常死者の霊が親族に憑依して愛情を表明すると、憑かれた相手の体に耐えがたい苦痛が現れる。これは、完全に悪霊である。愛しく想っている為、憑依したというのは、悪霊の言い訳で、自己正当化である。ラシ・ホンダンにすれば、いくら自己弁護を行っても本質は悪霊であるため、ブォは、容赦なく追い払う。

#### （4）存在感を示す悪霊

包月季ブォによれば、ホルチン左翼中旗SA村に住むある一家に、2009年7月から、ある変化が生じた。それは、夜になると、人の歩く足音が出て、それがだんだんと近づき、家屋の外を歩き回っている音が1晩中続く。この音を家族全員が感じ取ったという。これを受けて、村に住む包月季ブォの弟子貴香（1968年生、農民、女性）に原因究明と解決を依頼した。貴香は、墓から出て來た先祖の霊と判明したが、問題解決に当たって、先祖の墓場で儀礼実修を行われなければならないので、それを怖がって、師匠の包月季ブォに助けを求めた。包月季ブォは、その原因を次のように判定した。家の主人の祖父母が不仲だったため、祖母が20代の若さで自殺してしまった。祖父は再婚して前の妻から生まれた2人の子どもを両親に預け、新妻と別のところに家を建てて独居した。家の主人の父親は、これに不満を抱いて、祖父が死後、墓参りすることを拒否した。そして孫の代、つまり、この家の主人も祖父の墓参りをしていない。祖父の霊は、孫に自分の存在を知ってほしいと、夜になると家の近くに来て、メッセージを送っているのである。

祖父の霊の行為から、ヒー・ボンと判断できる。しかし、包月季は、祖父の霊を悪霊のカテゴリーに入れていない。祖父の霊は、子孫に取り憑いても、実害を加えていない。ただ自分の

存在を知らせ、年中行事の際に供物を供えることだけを望んでいるからである。そのため、夜やってくる祖父の霊を無理やりに追い出す必要もない。包月季ブォは、祖父と孫の関係を復活させるには、ブォが仲介役となって、孫が墓参りする必要がある、それは、清明節が最も良いという。それを実行するには、女性ブォだと好ましくないので、夫の白銀に依頼したいと語った。夫婦はこのように協力し合って、クライアントの救済に当たっている。

包月季によると、実は、祖父の霊を子孫の家の近くに来ないように、鎮めることができるが、あえてそうしない。子孫がいくら先祖に不満をもつといっても、先祖は先祖なので、祭祀すべきと考えているからである。これは、クライアントにとって、道徳的な教育にもなる。上述した2つの事例は、出来事を亡き先祖の霊の活動によって解釈したものである。悪霊の捉え方が、それに対する態度によって、様々な措置を取り得ることを示唆している。

## まとめ

ホルチン地方では、一般的に、人間に靈魂が3つあると言われる。一方、1つしかないのみなす人もいる。転生の概念がホルチン地方で存在する。3つある靈魂の1つは、墓を守り、1つは、世を彷徨い、もう1つは、転生すると言われる。ブォたちは、靈魂が3つあるという点では考えが一致する。ホルチン地方で、靈魂をさらに、細分化されている。「ウフッセン・スゥンス」で死霊を、「アミド・スゥンス」で生霊を指す。アミド・スゥンスをさらに、「アミン・スゥンス（命の靈魂）」、「ゴル・スゥンス（人間の真の自我、本質の靈魂）」と分類する。上述したように、人間が生きているのは、この「アミン・スゥンス」が身体中に存在するからである。しかし、「ゴル・スゥンス」が体を抜け出すことは、「アミン・スゥンス」の身体中の存在を揺るがし、したがって、生命力が弱体化され、遂に尽きる方向へ招く。すなわち「ゴル・スゥンス」は「アミン・スゥンス」、及び人間の生命をコントロールする。また、本人が生きているうちに、「ゴル・スゥンス」が体から離脱して、新しい命として転生した後、「アミン・スゥンス」が体から最終的に離脱することによって、本人が死ぬことがある。ゴル・スゥンスは、転生する靈魂である。

ホルチン地方で、天寿を全うした人のゴル・スゥンスは、エルリグと呼ばれるあの世に到達して、転生できるが、非業死に倒れた人のゴル・スゥンスは、あの世に到達することができず、世を彷徨い、悪霊になり安い危険な存在となる。悪霊は、祟る相手の体に憑依して病気にさせることがある。また、交通事故、事業の失敗など不幸を与えることがある。また、水と地に宿る自然界の悪霊が存在している。この種の悪霊が何らかの形で、人や家畜に災いを与えることができる。「ヒー・ボン」と「ボソ・ボン」という悪霊がある。前者は、悪霊の行為が見られるが、正体が普通の人の目に見えない。すなわち、人や物体に憑依しないが、その災いを実感できる。後者は、人間、特に年寄りの人が天寿を全うして、ゴル・スゥンスが身体から離脱して、アミン・スゥンスがまだ体に残っており、命があるときに、他の霊が身体に侵入して身体を占拠する。それによって、身体は、偽物のゴル・スゥンスに翻弄され、種々のおかしな行動を起

こす。

現在、内モンゴル・ホルチン地方で、シャマニズムが再活性化している。その特徴は、ブォの増加、ブォの治療を求めるクライアントの増加、ブォの行う治療、祭祀儀式的増加である。そのなかで、病因を悪霊の憑依、所為に帰することが多い。悪霊は、祟りとして、人や家畜に祟りを与えるほか、自分の存在感を示す、あるいは、愛情の表明として、又は供養してほしいと人に災いを与えることがある。この場合、崇られている側が原因を知らないで、ブォの託宣・治療を求める。ホルチン地方で、ブォが人間に取り憑いた悪霊を基本的に、①無理やり追い出す、②要求を満足させ喜ばせて追い出す、③脅かして追い出す。なかなか離れたがらない悪霊、あるいは、追い払っても繰り返して取り憑く悪霊を、強力なブォは「雷を落とす」と脅かす。肉体が滅びても靈魂は、引き続き生きる永遠性を持つが、ある力を与えると、滅びることができる。それは、力がブォは、守護霊の力で、雷を悪霊に落とすことで、悪霊を完全に滅ばせることができると信仰されている。ホルチン地方で、これに関する伝承やエピソードが今も語られている。

また、人間に憑依して、苦痛を与えている悪霊を切り離れた後、ブォは、次のような措置を取る。

- ① 患者の体から取り出した後に、どこに行くかは悪霊の自由意志に任せる。
- ② 横死者の霊の場合、あの世の主のエルリグ・ハーンにあの世に連れて行ってもらうことで転生を促す。また、寺院で読経してもらい悪霊をエルリグの世界に導く。
- ③ 間限定で抑え鎮める。3、5、10年と様々である。
- ④ 永遠に抑え鎮めておく。
- ⑤ 悪霊をブォが自分の補助霊に置き換える。すなわち、自分の支配下に入れる。

このように、内モンゴル・ホルチン地方では、靈魂に関する概念が細分化され、靈魂に関する信仰が根付いている。病因を悪霊に帰することが増加している。それがブォによって、開示され、適当な措置を取っている。ブォが人間と靈魂を含めた霊界の関係の調節者の機能を果たしている。

## 注

<sup>1</sup> 現在、多くの場合、狭義的に内モンゴルの通遼市と興安盟を指す。

<sup>2</sup> ホルチン地方で、あの世の居場所は、天上、天と地の間、地下という3つの見方がある。

<sup>3</sup> 具体的には、病気になり、病院に通ってもなかなか治らない。理由もなく人を罵る、酒におほれる、暴力的であるなどが挙げられる。

<sup>4</sup> 「魏」は「魂」の誤りであろう。

<sup>5</sup> ホルチン地方で麻黄が広く自生しており、地元の住民がそれを集めて販売して副収入を得る。

<sup>6</sup> ハムグ・アミタン・ジルガン・ズイルは、明らかに仏教の普及によって、民間で使われるようになった言葉である。直訳すれば、「あらゆる生き物、6種類」である、すなわち、6道の有情を指す。よく、「ハムグ・アミタン・ジルガン・ズイル・ネ・トゥレ」（一切の6道の有情のため）

と言われる。

<sup>7</sup> ホルチン地方のブォの中で、「ホンダン・ブォ」は、テングリの「ジェ」、すなわち、テングリの母方の親戚、または、テングリの姉妹の子どもと信仰され、テングリへの祭りを司り、特に、人間や家畜が雷に打たれて犠牲になった場合、ホンダン・ブォがそれを処理する儀式を行った。病気治療も行う。世襲型伝承が圧倒的であるが、非世襲型もみられる。ラシ・ホンダンによれば、かつて、ホンダンの地位は他のブォより高かったという。

<sup>8</sup> 16世紀後半以降、モンゴルでは、仏教を広める目的でシャマニズムを弾圧した。それに関する伝承の1つとして、ホルチン地方のシャマンの元祖であるホブグタイが鎖で縛られていると言われている。

<sup>9</sup> ドウジン・オスとは、井戸や蛇口から容器を手を持ったまま水を受け取り、それを直接飲用する、あるいは鍋に入れて沸かすことをいう。ポイントとなるのは、目的のところまで地面におかないことである。このような水が聖なる水とみなされるいわゆる初水である。

<sup>10</sup> レイチンとは、ホルチン地方の仏教に順応したシャマンの一種で、守護霊を呼ぶ際、仏教の経典を唱える場合がある。

<sup>11</sup> オボーとは「土地の住民の保護者たる所の神霊および土と水との龍の在住処として、且つこれらの諸神に供する献祭の場所として建設せられる。オボーの場所としてはその位置が快適で、雄大なまた高い山地の草と水とに富める場所を選ぶ」[バンザロフ 1971: 25]。

## 参考文献

### 〈日本語〉

柏原孝久、濱田純一1919『蒙古地誌』（下）富山房

佐々木宏幹1979『人間と宗教のあいだ 宗教人類学覚え書』耕土社

チメド・ダホルナブチ2005「モンゴル人の靈魂観と他界観—ホルチン・モンゴル人を事例として」（池田雅之編『共生と環境のコスモロジー』）成文堂

### 〈モンゴル語〉

オ・プルブ2006『モンゴルのシャマニズム』中国・民族出版社

ゲ・ハイルハン、ボ・ソド2001『モンゴル語とモンゴル族伝統文化』内モンゴル少年児童出版社

チ・ダライ1959『モンゴルシャマニズムの概説』内モンゴル社会科学院内部資料

バンザロフ、ウエー・エム・ミハイロフスキー（白鳥庫吉、高橋勝之訳）1974『シャーマニズムの研究』新時代社

ボラグ2003『蒙古文化研究双書 宗教』（上、下）内モンゴル教育出版社